

オペラ

関根 礼子

オペラは人間の内奥を掘り下げ、社会の現実を鋭く映し出すことができる。2025年に日本は「戦後80年」を迎えて平和を維持しているが、世界では戦争や紛争が絶えない。その激動と混迷の時代の中で、オペラの持ちうる優れた表現力が人間性を深め、平和を願う世相の一端となっていることを筆者は幾度か感じる事ができた。これは我が国においてオペラが声の魅力や舞台の豪華さ等を楽しむ趣味的な段階に留まらず、より深い芸術へ、生活に結びついた文化へと発展してきていることの証しではないだろうか。そのベースには歌唱力を始めとする全体的な表現力の向上がある。

例えばこの年唯一の海外団体だったウィーン国立歌劇場による2つの演目は、全体的な完成度と格調の高さで抜きん出ている。《フィガロの結婚》は2023年の最新の演出（バリー・コスキー）とベルトラン・ド・ピリーの指揮で、《ばらの騎士》は1968年の伝説的な演出（オットー・シェンク）とフィリップ・ジョルダンの指揮で、それぞれ人間の真実を深く描き出した。コロナ禍以降海外からの引越し公演がめっきり減少した中で、こうした欧州の成熟した舞台を観劇できるのも、国際関係が安定し平和であってこそその賜物なのだ。

セイジ・オザワ松本フェスティバルの《夏の夜の夢》も、フランス・リール歌劇場のプロダクションを使用したロラン・ペリーのスケール感抜群の夢幻的な演出が傑出。その特長を沖澤のどかの指揮が柔軟かつ適切に生かして作品の魅力を最高度に引き出した。キャストは全員海外からの起用。サイトウ・キネン・オーケストラは熟練の演奏でブリテンの音楽の美しさを堪能させ、OMF児童合唱団も十分に訓練されて舞台を彩った。ブリテンといえばこのところ国内複数のオーケストラが相次いで《戦争レクイエム》を演奏し、大きな感動と平和への願いを熱くアピールしている。併せて鑑賞することで、兵役を拒否し平和を心から愛した作曲者の自立した精神の豊かさを感じ取ることができた。

日本と世界の現実に最も直接的に切り込んで日本オペラが新しい段階に入ったことを感じさせたのは、新国立劇場が5年ぶりに初演した創作委嘱作品《ナターシャ》だった。主人公の男女2人の難民（イルゼ・エーレンス、山下裕賀）が地獄巡りをする途上、自然は破壊され、災害が起こり、人々は快楽におぼれ、ビジネスに狂う。政争やジェンダーの問

題等も織り込まれ、人間の傲慢さが嘆かれる。そして、地獄の底から再出発する静かな音楽で幕となる。これまでも日本には原爆や戦乱、環境破壊等の社会的テーマによるオペラはあったけれど、《ナターシャ》が画期的だったのは、より世界的な視野から今の社会を問うていることだ。台本（多和田葉子）は多言語で書かれ、場所や時代は特定されず、作曲（細川俊夫）にも様々な様式が混在して、多様な価値観が混在する今日の世界を映し出していた。

新国立劇場のもう一つの新制作《ヴォツェック》では、リチャード・ジョーンズの演出により、現代社会の孤独、孤立感、共生感の希薄さ等をもたらす悲劇が重厚に表現された。ちょうど100年前に世界初演された同作が、今日の社会情勢の中で蘇った感じだ。題名役を2ステージ好演したトーマス・ヨハネス・マイヤーはその後体調不良でカヴァーの駒田敏章に交代し、その駒田の健闘も伝えられた。駒田は《ラ・ボエーム》のショナールも本役で立派にこなしている。同劇場では急な代役でもきちんとこなせるカヴァー歌手が増えており、従来の常連に加えて新たな国内歌手の成長が実感できた一年だった。

年末にアンサンブル・ノマドが「演奏会形式舞台上演」として日本初演したヴィクトル・ウルマン作曲の喜歌劇《アトランティスの皇帝》は、ナチスの強制収容所に収容されていた1943年に作曲され、奇跡的に楽譜が遺されたもの。独裁者（須藤慎吾）のあまりの横暴ぶりに怒った死神（大塚博章）の作戦で、独裁者が自殺し戦争が終わるといふ、そのものずばりの政権批判だ。作曲者は翌年ガス室で殺されている。過去の歴史を振り返り、抵抗した人々の姿に思いを寄せることに、今どれほど大きな意味があるかはいうまでもない。

ここまで強烈な社会性はないにせよ、人間の内面やドラマに新たな光を当てた舞台が、東京二期会によって提供された。3例で紹介したい。《カルメン》ではイリーナ・ブルックの演出が、無国籍で今風の若者群像を描くことで、これまでの同作とは一風変わった新鮮な感覚を振りまいた。キャストがみせた歌唱や演技には自発的に湧き出たような感触が濃く、それだけ日本人の感性に添った人物像だったともいえる。《イオランタ》の作中に《くるみ割り人形》の一部をはめ込んだ公演では、ロッテ・デ・ベアの演出で若い女性の内心の世界がファンタジックに深められていた。

「目が見えるようになる」という設定を越えて、保護されていた少女期から自我に目覚め、精神的に自立して大人の世界に入っていき通過儀礼の創意豊かな表現だ。ウィーン・フォルクスオーパーとウィーン国立バレエ団との共同制作。この2公演にはブーイングも出たが、オペラを若い世代をはじめとするより幅広い層にアピールしうる可能性はある。また、コンチェルト・シリーズとして演奏会形式で上演された《ファウストの劫罰》でも、アニメ調をまじえた新感覚の映像（上田大樹）が演奏会形式上演の可能性を開いていた。以上、演出中心に述べたが、音楽面も負けず劣らずしっかりした取り組みがなされ、説得力のある歌唱で舞台成果を高めた歌手が何人かいたことを評価したい。

静岡音楽館AOIが開館30周年記念で演奏会形式上演した《ナクソス島のアリアドネ》は、国内トップクラスの歌手と器楽奏者を集め、沼尻竜典指揮で燃焼度の高い演奏を堪能させた。神奈川県立音楽堂と兵庫県立芸術文化センターが濱田芳通&アントネッロと共催した《オルフェオ》も、民間団体の力をホールが支えることで一段と充実した公演となった。このほかびわ湖ホール、藤沢市民オペラ、北とびあ等複数のホールや団体がそれぞれに健闘し、オペラ界全体としては実りの多い年だったといえる。

こうした成果の一方で、運営面での困難は増大している。コロナ禍後に続いている諸物価の高騰、助成金や寄付金等の減少、人材不足、ホール不足などが影を落とし、とりわけプロフェッショナルな中小規模公演や中小都市の地域型公演に打撃が大きい。その結果公共ホールの役割が決定的なほど重要になっており、地域に根差したオペラ活動の今後は地域の公共ホールの出方如何にかけられているといっても過言ではない。

そうした財政上の困難さや社会風潮の変化等を背景に、ギャラやキャスト起用にまつわる問題やセクハラ、パワハラといった演劇界・オペラ界で従来とかく見過ごされがちだった問題が一部で顕在化した。歴史の古い某オペラ団体では内部から訴えが起り、組織体制の転換を余儀なくされている。他の団体にとっても決して人ごとでは済まされない問題で、ほんの四半世紀前までは「手弁当精神」や「男性優位」が常態だったこの業界にも、ようやく改革の波が出てきたように見える。これを機により良い方向に進むことを願いたい。

関根礼子（せきね・れいこ）

国立音楽大学楽理学科卒、音楽旬報社勤務中より音楽評論、研究に従事、1981年からフリー。文化庁芸術祭審査委員、芸術文化振興基金専門委員他。昭和音楽大学オペラ研究所嘱託研究員として『日本のオペラ年鑑』初代編纂委員長を経て現在編纂委員。三菱UFJ信託芸術文化財団、ニッセイ文化振興財団、東京オペラシティ文化財団の各理事。主な著書に『日本オペラ史1953～』（水曜社、2011）、『オペラの世界』（三一書房、1983）、『オペラ事典』（東京堂出版、2013、共著）ほか。佐川吉男音楽賞実行委員ほか。